学びの出口を強く意識した国語科書写

●広島大学大学院教育学研究科　松本仁志

学びを他の学習活動や生活に開く

新学習指導要領においては、書写の学びを他の学習活動や生活に開くことが重視され、基礎段階から活用段階までの系統性がより明確なものとなった。文字を書く基礎となる「姿勢・執筆」「点画や一文字の書き方」「筆順」などの事項から、「文字の集まりの書き方」に関する事項へ、さらに「目的に応じた書き方」に関する事項へと、第一学年から第六学年にかけて段階的に配されている。特に「目的に応じた書き方」に関する指導事項が高学年に位置づけられたのが新学習指導要領において大きく変わった点の一つである。

【第五学年及び第六学年】

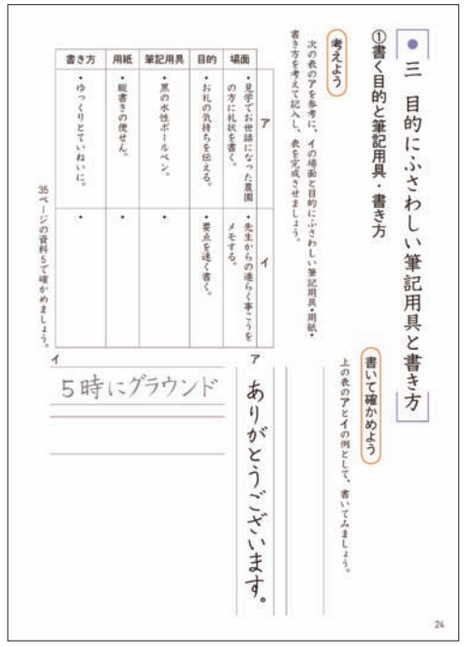
ア　用紙全体との関係に注意し、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと。

イ　目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと。

書写の授業では、半紙に書くことが多いが、学習活動や生活の場では、様々な用紙を使用する。その用紙が白紙なのか便せんなのか、また、どのような目的で書くのか、どのくらいの分量の文字を書くのかなどの、書く状況・条件の違いによって、文字の大きさや配列、書く速さ、使用する筆記具、書き方などは異なってくるのである。

それらを適切に判断するには、実際の書字場面において、目的や状況を判断しながら書く力（運用能力）が必要である。そして、その運用能力を育成するには、低・中学年における基礎学習を土台とした〈出口としての学び〉を設定し、運用能力の存在と意義を、児童にメタ認知させることが必要なのである。

小学校の低学年の段階から、児童の気づきや発見などを大切にし、児童が常に思考しながら学習が進められるような授業展開を心がけ、書写の学びを生活や他の学習活動へ開くことへ円滑につなげたい。



第6学年「目的にふさわしい筆記用具と書き方」

まつもと ひとし　広島大学大学院教育学研究科准教授。新しい文字指導のカリキュラムを模索しています。

毛筆の特徴を生かした指導による日常化への下支え

第三学年から毛筆書写が始まる。毛筆の持つ弾力性という特徴は、文字や文・文章をリズムよく効率よく書く力、すなわち書き進める際の運動能力を育てるのに効果的に働く。また、文字を大きく書くことには、文字の細部を確かめられるよさがあり、正しく整った文字の仕組みを認知し、正確に書く力を育てる上で効果がある。これまでは、字形や配列に関する後者の指導事項が中心であったが、書字の運動能力育成に関する前者の指導事項が加わったところが、新学習指導要領において大きく変化した点の一つである。このことによって、多字数を書くことが多い実際の書字活動場面を下支えすることになり、学びの出口である他の学習活動や生活へスムースに移行できるようになる。

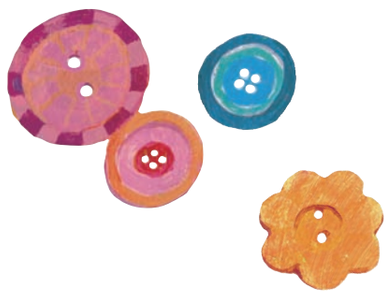
【第三学年及び第四学年】

ウ　点画の種類を理解するとともに、毛筆を使用して筆圧などに注意して書くこと。

【第五学年及び第六学年】

ウ　毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと。

中学年では、特に、横画・縦画・払いなどの点画の形とその形を作る筆の動きの類型や筆圧のかけ方などに注意しながら書く学習が求められる。

高学年では、穂先の動きと点画のつながりを意識して効率のよい運筆ができるようにする。各点画ごとの一定の穂先の動きについては中学年で指導しているので、高学年では、点画から点画へ、文字から文字へのつながりに重点を置いた指導になる。文字や文・文章の書き始めから書き終わりまでを無理なくつないで書き進める効率よい書写のリズムを習得させたい。

第3学年「点画の書き方③『はらい』」